

文学作品を用いた徳島市中心部における地域イメージの変化に関する研究

徳島大学 学生会員 ○小田 匠馬

徳島大学 正会員 渡辺 公次郎

1. はじめに

各地には、その地域を対象にした文学作品があり、中には、長きにわたり読み継がれ、その内容を多くの人々が共有することにより、地域のイメージ形成に寄与している作品もある。このイメージは、作品に登場する時代を表しており、まちの賑わい、衰退が繁栄されていると考えられる。本研究では、文学作品の記述から地域イメージを分析、読み解くことで、かつて四国最大の規模を誇った商業地であり、近年衰退化が著しい徳島市中心部の地域イメージの変化を明らかにする。

2. データ作成と分析方法

2-1. 分析対象の作品

研究対象は「眉山¹⁾」と「徳島の盆踊り²⁾」である。「眉山」は、さだまさし氏による 2004 年に発行された小説である。この作品では、母が余命短いと知り、娘（咲子）は徳島に帰郷する。そして会ったことのない父の存在と、母の想いに辿り着くまでの様子が、眉山や阿波踊りを交えて書かれている。「徳島の盆踊り」はポルトガル人のモラエス氏による 1916 年の随筆である。この作品では、徳島を舞台に、大正初期の日本人の生活と死生観が「盆」や、盆踊りとしての阿波おどりを通じて書かれている。本研究では、徳島中心部のイメージを知るため、徳島中心部について書かれていること、そして多くの人に読まれることで多くの読者のイメージ形成に寄与することを満たす作品として、これらを取り上げた。

2-2. 分析の方法

まず、2 作品を書籍からスキャニングし、それを基に OCR ソフトでテキスト化した。変換ミスの確認後、以下の手順で分析を行った。

(1) 形態素解析：フリーウェアのテキストマイニングソフトである KH Coder³⁾を用いて、文章を形態素に分割し、どのようなキーワードで描かれているかを把握した。(2) 共起ネットワーク：KH Coder を用いて、各キーワード間のつながりを示す、共起ネットワークを作成した。このつながりから、イメージの特徴を把握した。(3) 作品と空間との対応付け：まず、各作品で徳島市中心部について描かれている箇所を抜き出し、実際の空間と対応付けた。次に、記述内容から、各作品の筆者がその場所に対して、良い、悪いどちらの印象を持ったのかを判断した。これらを基に、各作品に登場する視点場、視対象を抜き出し、GIS 上で整理した。

以上の結果から、徳島市中心部の地域イメージの変化を考察した。

3. 分析結果

3-1. 記述されているキーワードの特徴

(1) 「徳島の盆踊り」では、出現順に人 (264)、日本 (234)、死者 (197)、徳島 (186) となっている。徳島市中心部がテーマになっている 9 から 26 章の場合、これらに加え、人 (64)、神 (40)、石 (33) が出現している。かつこ内は出現回数である。モラエスは、日本人の死生観への興味から、死者を吊る盆踊りの一つである阿波おどりの眉山ふもとの墓地、寺社、そして眉山の緑や人に注目している。

(2) 「眉山」では、出現順に、主人公である「咲子」(435)、その「母」(360)、「言う」(283)、医師の「寺澤」(160) となっている。「眉山」の場合、徳島市中心部だけを書いた章が分かれていないため、作品全体を分析する。母と咲子、担当医である寺沢との交流が中心であるが、阿波 (48)、連 (36)、エライヤッチャ (18)、鳴る (17) といった、阿波おどりに関連するキーワードも出現している。

